九州大学
KYUSHU UNIVERSITY

九州大学
人社系協働研究・教育
コモンズ

掲載日（2022/11/18）

書籍の概要

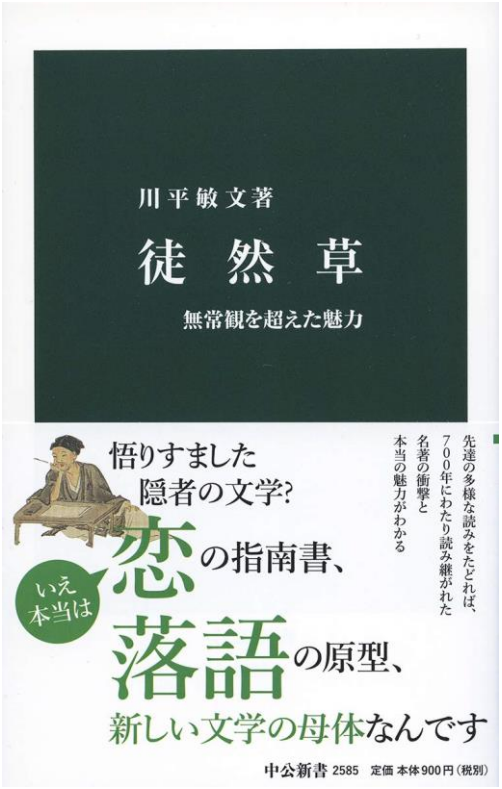
鎌倉時代末期、兼好法師が著した日本文学屈指の古典『徒然草』。自然の移ろいに美を見いだし、死や老いが主題の随想を含むため「無常観の文学」という理解が主流だ。しかし、ベストセラーだった江戸時代には多様な読み方がなされた。江戸幕府に仕えた儒者の林羅山は儒教に基づく注釈書を作り、近松門左衛門は浄瑠璃で兼好を色男として描いた。本書は『徒然草』の知られざる章段や先達の読みを通して奥深さと魅力に迫る。

著者から一言

いわゆる古典と称されるものなかには、千年以上も読み継がれてきたものがあります。しかしその「読み」のあり方は、その時代その時代の常識（コンテクスト）によって、微妙に変化してゆきます。

たとえば、『徒然草』の「つれづれ」とはどんな意味なのか。現代では、「退屈（ひまだ）」と訳すのが主流ですが、17 世紀ではそうではありません。「寂寥（さびしい）」と訳すのが主流です。「つれづれ」という言葉には、もともと「退屈」と「寂寥」と二つの意味があるのですが、時代によって、どちらに重きを置くかという「好み」が分かれるわけです。その「好み」を形成しているのが、その時代の常識（コンテクスト）ということになります。

私の研究関心は、このような文学テクストの置かれた「場」を考えることにあります。17 世紀の人たちの『徒然草』の「好み」のなかには、わたしたちの知らない――本当は『徒然草』の本質に迫るかもしれない、さまざまな面白い問題が含まれています。本書はそのような、『徒然草』の新しい魅力を伝えたくて執筆しました。　　人文科学研究院　川平敏文



徒然草：無常観を超えた魅力

川平 敏文　著

中央公論新社/286 ページ/2020 年 3 月出版

目次

序章	徒然草の誕生
第 1 章	「つれづれ」とは何か
第 2 章	教科書に載らない章段
第 3 章	兼好の巧みな話芸
第 4 章	黙読だけではない楽しみ方
第 5 章	古典としてのポテンシャル
終章	再び「つれづれ」とは何か

【お問合せ先】
九州大学　人文学研究院　川平敏文（カワヒラ　トシフミ）
E-Mail：kawahira*lit.kyushu-u.ac.jp [*を@に換えてください]